

落語「蛇含草」をめぐる

岡田 充博

—

上方落語の「蛇含草」は、ブラック・ユーモアの効いたサゲで知られる、見方によつてはとても怖い噺である。川戸貞吉『落語大百科 第二卷』（冬青社、二〇〇一年）を借りて、あらすじを紹介しておこう（三五五〜六頁）。

ご隠居さんの家に遊びにいった男が、軒下の風鈴の脇に妙な草がぶらさがっているのに気がついた。訊いてみると、「蛇含草」という草だとのこと。うわばみが人を吞んで腹がふくれ上がり、どうにもならないときにこの草をなめるのだという。すると不思議や腹のなかのものが綺麗に溶けてしまうのだそうだ。「悪い虫が入ってこないようにと、

おまじないにぶらさげてある」と聞いたこの男、「それなら私にもください」ともらい受け、着ている甚兵衛のヒモに結びつけた。

よもやま話に興じるうちに、ご隠居さんが、箱いっぱい詰まった餅を出してきて焼きはじめる。餅は因果とこの男の大好物。見ているうちに我慢出来なくなり、いきなり手を伸ばして餅を口に入れてしまった。ご隠居がムツとするのも無理はない。「なんとという不作法な奴」と怒るご隠居に、謝るどころか屁理屈を並べ立てたこの男、「五十や百の餅を食うことなど朝飯前だ」と胸を張った。売り言葉に買い言葉。「よし、それなら一箱の餅を全部食べてみる」と次から次へと餅を焼いてこの男に食わせたが、やはり一箱全部食べるのは無理

だった。二、三個残したところであえなくダウン。ほうほうの態で家に戻ったものの、腹がはち切れんばかりで苦しくってたまらない。ふと気がついたのが、さっきもらった蛇含草。これさえなめれば大丈夫と蛇含草を口に入れた……。

そこへやってきたのがご隠居さん。心配してきてくれたのである。部屋の様子を覗いてみると、人間の溶ける草を食べたものだから、人間が溶けて餅が甚兵衛を着て座っていた……。

これが関東に渡ると、餅では粹でないということになって、「そば清」（別名「蕎麦の羽織」「羽織の蕎麦」）に変わる。こちらも同書第三巻によって併せて示しておく（一三〇〜一頁）。

清兵衛さんという人は、「おそばの清さん」と呼ばれているほどのおそば好き。五十枚はペロリと平らげてしまうだけあって、お金を賭けてそばを食べ、その日その日を送っているのだった。その清さんが信州へいったときのことである。たまたま、ウワバミが人間を呑むところに出くわした。はちきれんばかりにお腹がふくれ上がったウワバミが、岩陰に生えている赤い草をペロペロと

「蛇含草」とは、一体どのような由来を持つものであるうか。原話を辿りながら、まずはこの辺から始めてみよう。

二つの噺の類話・原話については、武藤禎夫『江戸小咄類話事典』（東京堂出版、一九九六年）の「珍花」（二一〇〜一頁）、および『定本落語三百題』（岩波書店、二〇〇七年）の「蕎麦の羽織」（二五一〜三頁）が、江戸の小咄・笑話を中心に資料を挙げて詳しい。（2）その中から、以下に二話を挙げておく。寛文一二年（一六七二）刊行の作者不詳『一休閑東咄』に、「第七 大しよくはなしの事」がある。これは、相伴役の武士が語る大食自慢の法螺話を聞いた一休が、それにも勝る大食の話で武士の鼻を折ったという小咄で、一休が披露するのが次のような話である。武藤禎夫編『噺本大系』の第三巻（東京堂出版、一九七六年）から引く。

……それがし存じたる山ぶし有けるが、これもかけるくして、もち二斗をつかせてひとりしてのこらずしよくし、あまり腹ふくれけるにや、ひろき松ばらにはしりいで、ミかいばかり有ける松の木をねぢをりて、こしをかけやすみぬける所に、ちいさきへびおほきなるかわづをのミて、くるしげ

なめたところ、大きくふくらんだ腹がみるみる小さくなつていった。「あれは食べものをこなす草に違いない。あの草さえあればいくらでもそばを食べることが出来る!!」と、この草を江戸に持ち帰った。

さつそく五両で七十枚のそばを食べる賭けをはじめたが、六十八枚食べたところでどうにもこうにも食べられなくなつてしまった。「なアに、これさえあれば大丈夫」と、障子の外に出た清兵衛さんが赤い草をペロペロとなめはじめた。

いっぽうこちらは清兵衛さんと賭けをした人たち。いつまで経っても清兵衛さんが戻つてこないで障子を覗いてみると、清兵衛さんの姿はなく、おそばが羽織を着ていた……。

この「清兵衛さん」には、実在のモデルがあつたようである。神田鍛冶町の住人で、天保十一年（一八四〇）から何と八年間、朝昼晩とも蕎麦を食べ通した名物男と言われる。「1」となると落語「そば清」の成立は、十九世紀後半以降と、意外に新しいことになる。

さて、蛇が消化に使い、噺の演目ともなっている

に見えし所に、ミなれぬくさをくひければ、ぢミぢミと腹ハへりぬ。さてもよき事を見る物かなと、かの山ぶしくだんのくさをくひければ、うんのきハめにてや有けん、人のきゆる草にて、山ぶしハきえて、二斗のもち、ときんすゞかけ、ほらのかい、こんごうづえをもちてゐける……

寛延四年（一七五二）刊の岡白駒『訳準開口新語』全一卷は、漢文体の笑話集で、『噺本大系』第二〇巻（一九七九年）所収。その第五葉に載る話を、訓読文で示そう。

一道士 中野を行くに、蛇の蟾蜍を呑み、腹脹りて斗の如きを視る。蜿蜒として叢中に入り、一草を索めて食すれば、須臾にして脹り消えて故の如し。道士謂へらく、「是れ消食の薬草なり」と。

乃ち数茎を采りて還るも、是れ毒草なるを知らず。路に友人に遇ひ、自ら食量の大なるを誇り、店上の不托（もち）を指して曰く、「一頓に五十は、一盃の飯の若し」と。友人信ぜずして曰く、「吾子 能く五十を食せば、我は其れ東とならん（主人となつて奢ろう）。若し能はざれば、則ち再び我に其の価を賞はんのみ」と。

約既に定まり、乃ち店に就きて之を食ふ。恃む所有れば、嘔を忍びて強ひて食ひ、満悶死せんと欲す。是に於いて竊かに菓草を嘗むるに、身軀は渙然として解散し、肉銷け水流れ、但だ累累たる不托の上に、空しく羽衣の翩然たるを懸くるを見るのみ。〔3〕

両話ともに餅を食べる設定となっており、餅の話が古く、蕎麦の賭け食いは後の創案であることが分かる。

蕎麦は江戸時代初期から庶民食として広まり、製法も蕎麦粉のみの太麺の蕎麦切りから、小麦粉のつなぎを混ぜる細麺へと変化した。屋台や茶店・店舗など多くの蕎麦屋が繁盛するなか、異色の存在は浅草の寺院道光庵であった。ここで振舞われる蕎麦は、専門店を押しつけて江戸一番という評判で、寛延(一七四八)五〇の頃、門前には蕎麦目当ての人々が連日列をなす有り様だったという。〔4〕興味深いのは、この蕎麦の名所を詠った川柳に、明和二年(一七六五)作とされる「道光庵 草をなめたい顔ばかり」(『川柳評万句合』)の句が見られることである。〔5〕こゝには蛇のどろかし草の話が詠い込まれ、蕎麦好き―満腹―蛇の消化の草という、落語の骨子を

なす発想が既に窺われる。「そば清」は、こうした江戸の食文化と滑稽文学のなかで誕生したのである。このほかには、民話「どろかし草」が全国的に伝わっている。稲田浩二・小澤俊夫編『日本昔話通観』全二十九巻(同朋舎、一九七七〜九〇年)には、東北から九州に至る二十県の計三十四話(類話を含む)が収録され、さらに補遺には十六県二十六話の所在が追記されている。〔6〕

二

そこで中国の文献を当たってみると、「蛇含草」あるいは「蛇銜草」の名は、意外なことに本草学や医学関係の書籍に頻繁に登場する。こんな恐しい草が実在したのかと一瞬驚くけれども、実はそうではない。どろかし草とは全く別の薬効が、そこには記されているのである。例えば、宋の唐慎微『証類本草』

では、卷二・序例下に金瘡(切り傷)・悪瘡(悪性の腫れ物)・癰瘡(首にできる腫れ物)などの薬として、「蛇銜」の名が五箇所に見え、卷一〇・草部下品之上では、図を附して詳しい説明が加えられている。また明の李時珍『本草綱目』では、卷四・百病主治薬の「九漏(人体の九穴)」「諸蟲傷」の条に「蛇含草」の名が見え、卷四三・鱗部の「諸蛇」にも、「外治蛇蓋之薬」として「蛇含草」が挙げられている。要するに傷や腫れ物・虫蛇の毒などに効く或る実在の菓草が、「蛇含草(蛇銜草)」と呼ばれているのである。

何故こんなことになっているのかを考える前に、この菓草としての「蛇含草」にも、不思議な由来があることを紹介しておくべきであろう。六朝時代の志怪小説に、こんな話がある。『太平広記』巻四〇八・草木三の「蛇銜草」をもとに訳出しておこう。

『異苑』に言う、「昔 畑を耕していた農夫が、傷ついた蛇がいるのを目にとめた。一匹の蛇が現れ、草を銜えて傷の上に置いた。すると日が経って傷ついた蛇は走り去った。農夫がその草の残りの葉を取って傷を治療してみると、みな効き目があった。もともと草の名を知らなかったので、「蛇

銜」を名前とした。『抱朴子』に「蛇銜は、切断された指を元通り繋ぐことができる」というのは、これである」と。この話は『感応経』に出てくる。〔7〕

『異苑』は、南朝宋の劉敬叔の撰。『太平広記』が基づく『感応経』は、南朝宋の王延秀『感応伝』を指す〔8〕。菓草「蛇含草」は、この不思議な話に由来するものだったのである。では、菓草であったはずの「蛇含草」が、何故恐ろしい「どろかし草」の名として用いられるようになったのであろうか。この疑問を解いてくれるのは、時代をずっと降った清朝の志怪書、袁枚『子不語』(乾隆五三、一七八八年頃成立)である。その巻二十一に、次のような話が載せられている。

張文敏公の甥にあたる人が洞庭湖の西嶺山莊に仮寓していた。この台所には鶏卵を二個しまっておくことにしてあったが、每晚蛇に盗まれる様子を見てみると、一匹の白蛇が卵を呑みこんで行くのだが、首のところがふくれあがって、急には消化できない。すると蛇は一本の木をそばへ行き、首を幹にすりつける。そうすると鶏卵がたち

まち消化してしまふのであった。

張は蛇のいたずらが癩しやぢにさわつたので、木片を削つて卵の殻の中にはめこみ、もとの場所に置いた。蛇はまた呑みに来て、首が前のようにふくれ、また前の木にこすりつけたが、こんどは消化しない。蛇は困つたような様子であつたが、庭の中をくまなく這はいまわり、たくさんの木に目をとめながら問題にもしなかつた。そのうちに亭あずまやの西の深い草むらの中へ行き、緑色で三つまたになつた葉を選んで、前のようにこすりつけたら、木の卵も消化してしまつた。

張は翌日、その草を探し出し、消化不良をおこしたときにはそれであつと腹を撫なでることにした。そうするといつでも、すぐに快癒かいゆするのであつた。

張の近所の人で、背中にできものを病む者があつた。張は食物でも消化するのだから、毒も消せるだろうと考え、その草をうんと取つて来て煎じて飲ませた。背中のできものはたしかに、あつという間に消えたが、その人の体もしだいに小さくなり、やがて骨もろとも水に変わってしまった。患者の家族はかんかんになつて、張を縛りあげ、役所へつきだそうとする。張は助けてくれと哀願

する草」は、この不思議な草について取り上げた論考であるが、冒頭で「そば清」を紹介した後、この落語の原拠として北宋の何遠『春渚紀聞』の話を引きしている。同書卷十・記丹薬の「草 汞鉄を制して皆な庚かんと成す（草制汞鐵皆成庚）」には、水銀や鉄を黄金に変える不思議な草の話が三篇収められているが、その第三話は、次のような内容である。

…また臨安の僧の法堅が言うには、「歙州の旅人で潜山のなかを通る者がいて、一匹の蛇が腹を甚だしく脹はらませているのを眼にした。それは草むらを蛇行し、やがて一つの草に出会つと、嚙りつと腹につけてさすつた。するとしばらくして張りは消えてもとのようになり、蛇は去つていった。

旅人はこの草はきつと腹の張りを消してくれ、る葉だと思ひ、摘んで小箱の中に入れ、その夜、旅籠に泊まつた。すると隣の部屋に泊まり客がいて、ベッドで呻吟うげんしているとところだつた。旅人が尋ねると、腹が張つて苦しんでいるところだと言ふ。そこですぐ薬草を取りだして、釜に入れて煎じて煮汁を飲ませた。しばらくすると声が聞こえなくなつたので、良くなつたのだと思つた。

し、事実をうちあげたのだが、患者の家族は承知しない。そのうちに台所へ食事に行つたが、かまどのそばへ行くと草を煎じた鍋から異様な光が発している。近づいて見れば、鉄の鍋が黄金に変わつていたのであつた。そこでこれを患者の家族に贈り、かんべんしてもらつたが、それが何という草かは最後までわからなかつた。(9)

落語とはかなり異なる展開になつてはいるけれども、明らかに繋がる場所がある。肝心の草の名については、不明として結ばれている。しかし実はこの話、タイトルを見ると「蛇含草消木化金」とある。「蛇が口にする草が木を消化し金をつくる」という意味で、固有名詞ではないものの、「蛇含草」の三文字が見える。『異苑』の話と同様にこれを草名とすれば、人を溶かすところかし草もまた、同じ名称で呼ばれることになる。落語「蛇含草」の命名も、おそらくこのあたりに基づくと考えられるのである。

三

落語「蛇含草」の名前の由来は、これで明らかになつた。ただ、『子不語』の話には、さらに遡つて宋代に原話があつたようである。南方熊楠「人を水に

夜が明けるところ、隣部屋から水の滴る音だけが聞こえ、呼んでも返事がない。起き上がつて灯をともして見てみると、その人の血や肉はみな化して水になつてしまい、ただ骸骨だけがベッドに遺されている。そこで慌てて旅装を手にして逃げ出してしまつた。朝になり、宿の主人はこれを発見したが、どうしてこんなことになつたのか、どうとう分からなかつた。釜をきれいに洗つて飯を炊いてみると、釜全体が金になつていたので、こつそり遺骸を埋葬してしまつた。

長らく時が経つて恩赦があり、旅人が宿を訪れて、共にその事を語りあつたので、はじめて他の人に伝わつたのである」と。(10)

親切心が仇になつて病人を溶かしてしまふくんだりや、草を煎じた釜が金になること等、『子不語』の話とほぼ同じと言える。

落語「そば清」との関わりで南方翁が挙げているのは、この一話のみである。しかし、似た話はさらに唐代に遡つて拾い上げることが出来る。『太平広記』巻四九・蛇四が作者不詳の『聞奇録』を典故として引く「番禺書生」には、二つの話が併載されており、その第二話はつぎのような内容である。

：また南方で一匹の大蛇を見かけた役人がいた。長さは数丈、太さは差し渡し一尺五寸ばかりもあり、腹の中に何か杭か切り株のようなものが入っていた。が、一本の樹に沿って這いその葉を食べると、腹の中の物は次第に消えて無くなった。里の者が言うには、「この蛇は鹿を呑んでいて、この木の葉はそれを消化するのです」と。そこで従者に命じてその葉を採らせてしまい込んだ。帰ったあと、食べた物が消化せず、腹が張ったことがあった。そこでその葉を取りだし、煮汁を作って飲んだ。一晚経って、昼時になつても返事がないので、掛け布団を取払って見てみると、ただ干涸らびた骸骨だけが残っていて、他はみな水と化してしまっていた。「11」

短い話であるが、自身が葉を煎じて飲んで溶けてしまうところは、『春渚紀聞』や『子不語』よりもずっと落語（およびその直接の原話となった『一休閑東咄』『開口新語』など）に近い。日本におけるこの話群の源流としては、やはりこの資料を忘れてはならないであろう。

なお、『春渚紀聞』から『子不語』へと受け継がれる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった「13」と語り始めており、智恵ある動物とも見なされていた。先に紹介した『異苑』の薬草「蛇含草」は、実はギリシア神話のポリュエイドスの話に源流を持つもので、ヨーロッパにおいては古くから、蛇の智恵は薬草についての知識と深く関わっていたのである。ギリシア神話中の名医、アスクレピオスが手にする杖には一匹の蛇が絡んでいる。（この杖の図像は、現在でも医療・手術の象徴として世界的に広く用いられ、世界保健機関や米国医師会などのシンボルマークとなっている。）「14」

中国における蛇のイメージに関して言えば、智恵との結びつきはヨーロッパに比べて希薄である。しかし、『異苑』の「蛇含草」より以降、不思議な草との繋がりは、強く意識され続けたと考えられる。とろかし草と蛇との結びつきの背景には、そうした蛇のイメージが反映している筈である。

また、獲物を丸呑みにする蛇の消化力も、人間にとって驚きと恐怖の対象であった。それが誇張されて、人間あるいは鹿などの獣、果ては象まで呑み込んでしまう大蛇の話となる。「15」その際、蛇自身の分泌液ではなく、さらに薬草の力を借りる発想が生まれるのは、「智恵」（ないしは「草についての

ていった「とろかし草」の話は、ほかにも類話も生んでいる。『子不語』に十年ほど先立って、乾隆四三年（一七七八）に刊行された清の王楫『秋燈叢話』巻八には、張李二人の卵売りと蛇の話が載り、林蘭編『独腿孩子』（北新書局、一九三二年）が紹介する浙江省新市の民話にも、「蛇喫蛋」がある。不気味さと意外性が織りなすこの奇譚は、母国の中国においても、幾つもの類話を生んで伝播していたようである。「12」

四

落語「蛇含草」「そば清」の原話に関しては、これではぼ明らかになった。ただ、蛇ととろかし草の結びつきについては、もう少し補っておきたいことがある。

蛇は、洋の東西を問わず人に忌み嫌われる動物であり続けた。しかしその一方、神秘的な能力を持つ畏怖すべき存在でもあった。それは古代の蛇神信仰などに窺われるし、蛇の強い生命力と脱皮を繰り返す生体は、若返り、不死のイメージと結びついて様々な神話伝説を生んでいる。また、『旧約聖書』の「創世記」では、イヴを唆して人類を原罪の道に引き入れた邪悪な存在となっているが、同記はこの話を「主

知識」のイメージからすれば必然の成り行きと言える。説話における「とろかし草」の誕生は、こうした視点からも説明出来るように思われる。

なお、南方「人を水にする草」は、蛇が消化のために草を食べることについて、面白い事例を紹介している。曰く、「今年（大正九年・筆者注）九月四日付で江州高島郡西床村の井花伊左衛門氏より来状あり。去る七月三十一日、越中国新川郡小黒部谷大ヌケ付近を通行中、人夫黒岩直吉（信州大町住）が殺した蝮は、約四尺五寸長く、大なる蟾蜍を呑み、その頭の方半分は溶け掛かりおった。その蝮の胃中に草の茎と葉あり、人夫これはミズナと名づけ人の食用とすという。：〔中略〕：人夫いわく、これまで蝮をしばしば割いたが、こんな物を見出でたは今度始めてだ、と。偶然呑んだものか、または消化作用をたすくためかは不明だが、蟾蜍より後に呑んだとは葉が胃の上部あったで明らかに知らる。落語家その他のしばしば語る、蛇人を呑んで草を喰い消化を励ます譚は、かかる事実を視て生じたるかと思考す、とあって、蝮の胃から出た葉茎半分を贈られた」と。

南方翁は、ここからさらに考証を進め、この「ミズナ」が小野蘭山『本草綱目啓蒙』（一八〇三年、享

和(三)卷一〇にいう「クチナワジヨウゴ」(別名をミズナ、ミズは蚯蚓の略)を指すらしいとする。ただ、贈られた葉茎はクチナワジヨウゴとはまるで別物の形態をしていたようで、この点に疑問を残しながら、論は「果たして蝮の腹から出た草が工夫(「人夫…筆者注」)の言った通りミズナの一変態か、あるいはその近属の植物の若い葉茎であったら——これはあり得べからざることでない——ミズナをクチナワジヨウゴ、またウワバミソウと称するは正しき理由あり。犬猫が時として生草を咬み、家鶏が消化を助けんとて砂礫を啄むと齊しく、科学上の一研究を要することじゃ」と結ばれる。

植物に関しては全く知識を欠くので、「ミズナ」談義は以上の紹介にとどめ、草についても一つ付言しておきたい。

『春渚紀聞』『子不語』の記事では、蛇のどろかし草は釜を金に変える効能を持っていた。これについても南方論文は、『本草綱目』を引いて、鉄を金に変える「透山根」「金英草」の草名が見えることを指摘している。「16」そこで『本草綱目』卷一七下の「海芋」の条を開いてみると、附録として「透山根」の項目があり、『岫嶼神書』『庚辛玉冊』等を引いての解説が加えられている。『庚辛玉冊』の文によれば、「透

い。話に現れるのは、恐るべき生命力を持つ不気味な黒蛇のみである。

李丹の弟は中風を患っていたが、或るひとに烏蛇酒なら治せると言われた。そこで黒い蛇を求めて、生きたまま甕の中に入れ、麴で醸したところ、カツカツという蛇の音が数日絶えなかった。酒が熟成すると、猛烈な香りがしたが、なみなみと注いで呑んだ。するとたちまち全身が水になってしまい、ただ毛髪が残っているだけであった。「18」

蛇酒が人を溶かしてしまった話で、落語「蛇含草」と直接関わる訳ではない。しかし、善意が仇となつて人を溶かしてしまう展開や、「蛇」と「とろかし」という話素に注目するならば、『聞奇録』や『春渚紀聞』の話とも関連する資料として興味深い。獲物を呑んだ蛇の驚くべき消化力は、一方で消化の薬草を知る蛇の智慧、他方で蛇の体液自体が持つ驚異的な溶解力(19)という、両様の想像を確かに生み出しているのである。

なお、「烏蛇酒」が風疾に効くという話は、張鷟『朝野僉載』や裴鉞『伝奇』など(20)、唐代の他の資料にも見え、或る人の助言が決して論拠のないもので

山根は武都に出づ。汁を取りて鉄に点ずれば、立ちどころに黄金となる。大毒ありて、人誤つてこれを食すれば、化して紫水となる(透山根出武都。取汁點鐵、立成黄金。有大毒、人誤食之、化爲紫水)とあり、続けて、蜀の地に生える「金英草」も鉄を金に変え、人が口にすれば、たちまち紫の水になってしまうと記す。李時珍はさらに『春渚紀聞』の記事を引き、「何氏の載するところを観るに、即ち是れ透山根すなわち金英草の類ならん(觀何氏之所載、即是透山根乃金英草之類)とも述べている。蛇のどろかし草が黄金と結びつくのは、如何にも唐突な感じがしたが、何故そのような話になったかは、これで説明がつく。つまり『春渚紀聞』の話は、『聞奇録』のどろかし草と「透山根」「金英草」の伝承とが、人を溶かす草という共通点をもとに接合して誕生したのである。「17」

五

以上、落語「蛇含草」をテーマに、関連する資料を紹介しながら考察を加えてみた。

最後にもう一つ、人が溶かしてしまう怖い話を、唐の李肇『唐国史補』巻上から取り上げておきたい。ただし、そこに「とろかし草」が登場する訳ではない。似て非なる、危険この上ない毒蛇だったようである。薬理作用の激しい即効薬や生兵法の素人治療は、うっかり信用するとんでもない結果を招く——そういう事例は、今も昔も跡を絶たない。御用心、御用心。

注

1 「清兵衛さん」については、インターネット情報の「落語「そば清」の舞台をゆく」
ginjo.fc2web.com/123sobasei/sobasei.htm による。

ただ、これがどのような文献資料に基づくものかは、未調査。

2 武藤氏は、他に『軽口ちはこの玉』(一七五)の一話を紹介する。布施昌一『日本人の笑いと落語』(三一書房、一九七〇年)は、さらに津坂孝紳『初学習文楷梯訳準笑話』(一一八二四年、文政七)正篇の類話を挙げる(二三五頁)。稲田浩二編『日本昔話通観 研究篇2 日本昔話と古典』(同朋舎、一九九八年)は、これに林羅三『怪談全書』(一六九八年、元禄一)「巻二の「欽客」を加える(一1123 ところかし草」七〇八〜九頁)。

なお『軽口ちはこの玉』は、撰者不詳「軽口手葉古の玉」

の誤記か。同書は全五冊、享保元年刊。ただ、『国書総目録』には、「日本小説年表による」とあって、写本・版本等の記載はない（第二巻二五七頁四段）。

3 原文は次の通り。返り点、ルビは省略した。

一道士行中野、視蛇呑蟪蝮、腹脹如斗。蛇涎入叢中、索一草食、須臾脹消如故。道士謂、是消食藥艸、乃采數莖還、不知是毒艸也。路遇友人、自誇食量大、指店上不托、曰、一頓五十、若一孟飯。友人不信曰、吾子能食五十、我其爲東矣。若不能、則再賞我其價耳。約既定、乃就店食之。有所恃、忍嘔強食、滿悶欲死。於是竊嘗藥草、身軀渙然解散、肉銷水流、但見累累不托上、空懸羽衣翩然而已。

4 江戸の食文化と蕎麦に関しては、次の文献を参照した。日本風俗史学会編『図説江戸時代食生活事典』（雄山閣出版、一九八九年）

笠井俊彌『蕎麦 江戸の食文化』（岩波書店、二〇〇一年）また、注1に記したインターネットの資料、『落語』「そば清」の舞台をゆくも大変参考になった。

道光庵は、浅草の一心山称往院極楽寺内にあった支院。享保（一七一六〜三五）の頃、この庵主が信州松本出身で蕎麦打ちが上手く、檀家の人々向けに自ら蕎麦を打って振る舞ったのが始まりという。蕎麦は、浅い椀に盛った御膳蕎麦で、寺方のため魚類のダシは使わず、辛味ダイコ

ごちそうが二、不明が一。）

7 原文は次の通り。テキストは中華書局点校本（一九六一年新一版、一九八一年第二次印刷）による。

異苑云。昔有田父耕地。值見傷蛇在焉。有一蛇。銜草著瘡上。經日傷蛇走。田父取其草餘葉以治瘡。皆驗。本不知草名。因以蛇銜爲名。抱朴子云。蛇銜能續已斷之指如故。是也。 出感應經

なお、『太平御覽』卷七四二・疾病部五・瘡にも『異苑』から同じ記事を引く。ただ『太平広記』に比べ、文章が簡略化されている。

8 王汝濤主編『太平広記選（修訂本）』（齊魯書社、一九八七年）上冊の考証による（上冊一五七頁）。『異苑』のテキストには、点校活字本として『異苑 談藪』（古小説叢刊・中華書局、一九九六年）『異苑 范掌点校』、『漢魏六朝筆記小説大観』（歴代筆記小説大観・上海古籍出版社、一九九九年）『異苑』黄益元点校）があり、こちらも参照した。同話は卷三所収。

9 前野直彬訳『閑微草堂筆記 子不語 述異記 秋灯叢話 諧譚 耳食録』（中国古典文学大系42・平凡社、一九七一年）の訳文によった（三六二〜三頁）。ほかに手代木公助訳『子不語』全五巻（東洋文庫・平凡社、二〇一〇年）があり、これも参照した（第五巻二四〜六頁）。

王英志主編『袁枚全集 肆 子不語・続子不語』（江蘇古籍出版社、一九九三年）によれば、原文は次の通り。『子

ンの絞り汁を添えて出した。その美味さに驚き、信心にかこつけ蕎麦目当てに押しかけてくる者も現れ、門前列をなす有様であった。かくして寺か蕎麦屋か分からないような状態となり、これを見かねた称往院住職が、天明六年（一七八六）、「不許蕎麦院内製之蕎麦入境内」の石碑を門前に建て、蕎麦を禁止してしまった。なお、この石碑は安政の大地震（一八五五）で三つに折れてしまったが、昭和二年、称往院が烏山寺町に移転の際に土中から発見され、現在の称往院門前に修復されて立つ。

5 『蕎麦 江戸の食文化』一〇九頁による。この川柳の作者は、おそらく林羅山『怪談全書』（一六九八年、元禄一）の「歎客」（次節で紹介する『春渚紀聞』所収話の邦訳）あたりから、蛇のとろかし草の知識を得たのである。同書は、もともと三代將軍家光の病床の無聊を慰めるために、寛永（一六二四〜四四）の末年、羅山が筆を起こしたものであったが、元禄一年以降に幾度か版をあらためて刊行され、多くの読者を得た。

6 補遺を除く三十四話について、大食いの食べ物を見てゆくと、東北・関東十五話のうちでは、蕎麦が九話、餅が五話となっていて、残る一話は大根汁（福島県）である。中部、関西以西の十九話では、蕎麦が十二話、餅は三話となっていて、意外に蕎麦が多い。ただ、香川県讃岐地方の話は、さすがに「うどん」になっている。（残る三話は、

不語』は、周欣校点。）

張文敏公有族侄、寓洞庭之西嶺山莊、藏兩雞卵于厨舍、每夜爲蛇所竊、伺之、見一白蛇吞卵而去、頸中膨亨、不能遽消、乃行至一樹上、以頸摩之、須臾雞卵化矣。張惡其貪、戲削木柿、裝入雞卵殼中、仍放原處、蛇果來吞、頸脹如故、再至前樹摩擦、竟不能消。蛇有窘狀、遍歷園中諸樹、睨而不顧、忽往亭西深草中、擇其葉綠色而三叉者、摩擦如前、木卵消矣。張次日認明此草、取以摩停食病、略一拂拭、無不立愈。其鄰有患發背者、張思、食物尚消、毒亦可消。乃將此草一兩、煮湯飲之。須臾間、背瘡果愈、而身漸縮小、久之、并骨俱化作水。病家大怒、將張捆縛鳴官。張哀求、以實情自白、病家不肯休。往厨間吃飯、入內、視鍋上有異光照耀、就觀、則鐵鍋已化黃金矣。乃捨之、且謝之、究亦不知何草也。

10 この資料について、南方は自身の発見ではなく、『日本人』六九号所載の論考「翻訳種の落語」に基づく」と記している。同話の原文は、四庫全書本によれば次の通り。

…又臨安僧法堅言、有歎客經於潛山中、見一蛇其腹漲甚。蜿蜒草中、徐過一草、便嚙破以腹就磨、頃之漲消如故、蛇去。客念此草必消漲毒之藥、取至篋中、夜宿旅邸。鄰房有過人、方呻吟牀第間。客就訊之、云、正爲腹漲所苦。即取藥、就釜煎一盃湯飲之。頃之不復聞聲、意謂良。

已至曉、但聞鄰房滴水聲、呼其人不復應、即起燭燈視之、則其人血肉俱化爲水、獨遺骸臥、急挈裝而逃。至明、客邸主人視之、了不測其何爲至此。及潔釜炊飯、則釜通體成金、乃密瘞其骸。既久經赦、客至邸、共語其事、方傳外人也。

11 この資料についても、すでに武藤禎夫『江戸小咄類話事典』『定本落語三百題』、稲田浩二編『日本昔話通観 研究篇2』等に指摘がある。中華書局点校本によれば、原文は次の通り。

…又有官人於南中見一大蛇。長數丈。徑可一尺五寸。腹內有物。如椽椹之類。沿一樹食其葉。腹中之物。漸消無所有。而里人云。此蛇吞鹿。此木葉能消之。遂令從者採其葉收之。歸後。或食不消。腹脹。乃取其葉作湯飲之。經宵。及午不報。及撤被視之。唯殘枯骸。餘化爲水矣。

また、小島瓔禮編著『蛇の宇宙誌 蛇をめぐる民俗自然誌について』（東京美術、一九九一年）所収の同氏「三枚の蛇の葉——日本の落語から古代ギリシアまで——」は、不死の薬草および人を溶かす草としての「蛇含草」について、各国の資料を網羅して詳しく、この『聞奇録』話も紹介されている。小島論文以前には、柴田青曲『妖異博物館』（青蛙房、一九六三年／ちくま文庫、二〇〇五年）に「人の溶ける薬」があつて、中日の文献を多く挙げており、『聞奇録』にも言及している。

ギリシア神話のポリュエイドスの話は、次のようなものである。

蜂蜜の甕に落ちて死んだグラウコス（ミーノース王の息子）を生き返らせるため、占い師ポリュエイドスはグラウコスと共に墓中に閉じ込められる。そこに現れた一匹の蛇をポリュエイドスが剣で殺すと、別のへびが薬草を銜えてあらわれ、死んだ蛇にこすりつけると生き返る。ポリュエイドスは早速その薬草を使って、グラウコスを蘇生させる。

この神話は世界各地に伝わり、『グリム童話集』の「三枚の蛇の葉」をはじめとして、様々な類話を生んでいる。その伝播と「蛇含草」〔異苑〕については、稿を改めて論じることしたい。

15 『太平御覧』巻九三三・鱗介第五・蛇上に、『山海経』を引いて「巴蛇は象を呑みて三歳にして骨を出す。…」（巴蛇呑象三歳而出骨。…）と記し、さらに「今、南方の蚺蛇は、鹿を呑みて已に爛すれば、自ら樹に纏ひ、腹中の骨は皆な鱗甲の間に出づとは、此の類なり。（今南方蚺蛇、呑鹿已爛、自纏於樹、腹中骨皆穿鱗甲間出、此類也）」と附記する。『山海経』の該当箇所は卷一〇・海内南経で、若干の文字の異同がある。また、先に第二話を取り上げた『太平広記』巻四五九の「番禺書生」の、第一話は象を丸呑みにする蛇の話である。

12 『秋燈叢話』の話では飲ませた相手が溶け、『独腿孩子』の話では自分が飲んで溶ける展開となっており、鍋が金に変わる話はいずれも省かれている。なお、後者は澤田瑞穂訳『中国の昔話』（世界民間文芸叢書第一巻・三弥井書店、一九七五年）に、「卵を呑む蛇」と題して邦訳されている（一〇四～六頁）。

13 共同訳聖書実行委員会『聖書 新共同訳』（日本聖書協会、一九八七／一九九七年）の訳文によった。

14 蛇のイメージに関しては、主として左記の文献を参照した。

アト・ド・フリース著、山下主一郎ほか訳『イメージ・シンボル事典』（大修館書店、一九八四年）「serpent」（五六二～八頁）

ジャン・ポール・クレベール著、竹内信夫ほか訳『動物シンボル事典』（大修館書店、一九八九年）「へび」「蛇」（三〇八～三二七頁）

赤祖父哲二、川合康三、金文京、斎藤武生、ジョン・ボチャラリ、林史典、半沢幹一編『日・中・英言語文化事典』（マクミランランゲージハウス、二〇〇〇年）「へび」（一四二～四六頁）

R&Dモリス著、小原秀雄監修、藤野邦夫訳『人間と蛇 かくも深きふしぎな関係』（平凡社ライブラリー584、二〇〇六年）

16 「透山根」「金英草」については、南方熊楠以外にも指摘がある。幸田露伴は「園外文学漫談」のなかで、落語「そば清」を引きながら、元禄一三年（一七〇〇）刊行の『堪忍記』に、この草の記事が見えると述べている。『露伴全集 第十八巻』（岩波書店、一九四九年）二二一～二頁。『国書総目録』によれば（第二巻三五二～三五三段）、同書は浅井了意撰、明暦元年（一六五五）成書。内閣文庫に写本、国会図書館、東京大学、岩瀬文庫ほかに版本を所蔵。

17 『庚辛玉冊』は明の寧献王権（太祖の第十七子）の撰で、『明史』巻七四・芸文志三・子部道家類などに記載がある。『岫巖神書』は、明代の類書『古今彙説』第五巻に九霞子の撰として名が見えることを、清の黃虞稷『千頃堂書目』が巻一五に記すものの、その他の書目類には見当たらず、おそらくは明代の書。ということは、いずれも北宋の『春渚紀聞』より後の成立で、厳密に言えば、両書の「透山根」「金英草」の記事を「欽客」の話の源流に据えることは出来ない。しかし、こうした鉄を金に変え、人を水にする草の伝承が、宋代あるいはそれ以前に存在した可能性は、決して低くないであろう。李時珍の説もその前提の上に語られている。

なお、南宋の洪邁『夷堅志』の支峯志卷四に載る「祖圓接待庵」は、釜を銀に変える草の話である。人を水にする危険な草ではないが、鉄を金銀に変える草の伝承の、

宋代における広がりを示しているように思われる。

18 原文は次の通り。『唐国史補 因話録』上海古籍出版社、一九五七年、一九七九年新一版)による。

李丹之弟患風疾、或説烏蛇酒可療、乃求黑蛇、生置甕中、醞以麴漿、憂憂蛇聲、數日不絶。及熟、香氣酷烈、引滿而飲之、斯須悉化爲水、惟毛髮存焉。

なお同話は、『太平広記』巻四五八・蛇三では「李舟弟」となっており、文章に若干の異同が見られる。

19 蛇の消化力が誇張されて生まれた話は、他にも少なくない。些か脱線するが、『太平広記』の蛇部から幾つか拾っておく。巻四五七・蛇二の「天寶樵人」(出典は唐・戴孚『広異記』)は、大蛇に呑み込まれ、蛇の腹を割いて脱出した樵夫の皮膚半身が、溶けて無くなり白癩のようになったという話。同巻の「杜疇」(出典は唐・牛肅『紀聞』)は、蛇の胃液ではなく猛毒の話で、両頭の蛇に咬まれた蛇遣いが死に、骨と肉が溶けて全身が水囊のようになる。巻四五八・蛇三の「李黄」(出典は唐・鄭遠古『博異志』)もぞつとする話で、美女に化けた蛇の精と三夜を共にした男が、帰宅就寝後、氣付くと首から下が溶けて水になっている。

また、蛇の毒が蛇自身を溶かしてしまう話もある、『太平広記』巻四五八・蛇三の「鄧甲」(出典は唐・裴鏘『伝奇』)は、禁蛇の術によって蛇を集め、県の長官の足を咬んだの生血を使ったものであったところから、迷竄譚へと展開してゆく怪談。話の末尾に「涵にはもともと風疾があったが、蛇酒を飲んだことよって治癒した(而愈焉涵本有風疾、因飲蛇酒而愈焉)」とある。なお、『伝奇』の点校本は幾種類も出版されているが、周楞伽輯注『裴鏘伝奇』(上海古籍出版社、一九八〇年)の校注が詳しく、これを参照した。

ほかに『太平広記』巻四五八・蛇三に載る「馮但」「陸紹」(出典は共に唐・段成式『酉陽雜俎』)にも、蛇酒が登場する。

ものを見つけ出す。そして厭がる蛇を叱りつけ、無理矢理毒を吸い戻させると、その蛇は皮膚が破れて水になっってしまう。なお、人を咬んだ蛇に命じて毒を吸い出させるといふ呪術は、実はインドに起源を持つ。南方熊楠『十二支考』「蛇に関する民俗と伝説」の「四 蛇の特質」を参照(平凡社『全集』第一巻、一七二〜三頁/岩波文庫本上冊、二二九〜四〇頁)。ただ、このインドの呪術の場合は、蛇自身が溶けてしまうことはないようである。

20 『朝野僉載』巻一に、盧元欽が蛇肉で大瘋を治した話があり、続いて次のような話を併載する。

商州に大瘋を患う人がいたが、家族はこれを厭い、山中に茅葺きのあばら屋を建てて住まわせていた。烏蛇がいて酒甕の中に落ちたが、病人は知らずに、その酒を飲んで次第に治癒していった。甕の底にあった蛇の骨があらわれて、はじめてその訳を知ったのである。(又商州有人患大瘋、家人惡之、山中爲起茅舍。有烏蛇墜酒甕中、病人不知、飲酒漸差。罌底見蛇骨、方知其由也。)

原文は、『隋唐嘉話 朝野僉載』(唐宋史料筆記叢刊・中華書局、一九七九年)による。(同話は『太平広記』巻二二八・医一にも、「盧元欽」と題して載るが、字句に異同はない。)

また『太平広記』巻三七二・精怪五に、『伝奇』を出典として「盧涵」を載せる。この話は、暮れ方に出会って酒を酌み交わした美女がこの世の者ではなく、酒は烏蛇